

## 「パノラマ」の言葉は エディンバラで生まれた 笠原順路



およそ眺望なるものが嫌いな人はいない。それは、見る人の心を拓げるからだ、というのが私のかねてからの持論である。18世紀英国の眺望詩や哲学書などには、「眺望が心を拓げる」という表現が散見されるし、それが実際の造園技法に影響を与えている例もある。しかし、今それを真正面から論ずる紙幅はない。

話をエディンバラに限定しよう。18世紀はじめ、スペイン継承戦争に勝った英国は、世界の富を自国内に蓄え、ブレナム宮殿\*をはじめとする大貴族の邸宅は言うに及ばず、ジェントリ郷土階級の館も、こぞって富の象徴としての藝術作品を多数、所有するようになる。そうした館を訪れては住込みで肖像画を描いてなりわい生業としていた、アイルランド出身の旅回りのしがない画家ロバート・バーカー (Robert Barker, 1739-1806) がエディンバラにやって来たのがいつのことか、定かではない。ただ分かっているのは、1786年には、幼少時より画業の手ほどきをしてきた当時12歳の息子ヘンリー・アストン・バーカー (Henry Aston Barker, 1774-1856) をともない、カールトン・ヒルからの眺望をスケッチしていた、ということだけである。

今と違って、当時のカールトン・ヒルには、パルテノン神殿よろしく北のアテネの街をへいげい睥睨している帝都記念神殿 (National Monument) もなければ、ネルソン記念碑やデューガルド・ステュアート記念碑もなかった。わずかにトマス・ショートが建てたゴシック風の天文観測館だけが丘の南西の隅からプリンスイーズ通りを見下ろしているだけであった。

父バーカーは、息子とともに丘からの眺望を何葉かの絵に仕上げ、それを市内に設けた円筒状の展示スペースの内側にかけて、円筒中央部から観客に見せるような装置をつくった。1787年のことである。かなりの成功を収めたとみえて、バーカーはこの装置で特許も取っている (特許番号=1787-1612番)。ちなみ



に特許申請時にはフランス語で「一望のもとに見渡す自然 (La Nature a Coup d'Oeil)」と名づけた。ある記録によると2年後、スコットランド首都の眺望図がイングランドの首都ロンドンで展示された。1792年という説もある。いずれにしても、もうバーカーは貴族の庇護を必要としなくなったのだ。相手にするのは大衆である。彼はフランス語の名称を排し、ギリシア語から造語して「パノラマ (panorama)」と名づけた。「全てに見えるもの」という意味である。1793年には、世界初のパノラマ専用の円筒形劇場がロンドンのレスター広場近くにつくられ、その後、欧州や米国の各都市にもパノラマ専用劇場が建てられてゆく。

そもそも、神は全てを見ることが出来、神しか全てを見ることが出来なかった。高所からの眺望は神のみに許されていた特権であった。しかし、ルネサンス期になって、人間が世界の中心の座を占めるようになると、神は人間にも高所からの眺望を許すようになる。ミルトンの『失楽園』(1667) 第11-12巻で、大天使ミカエルがアダムを山頂へ連れてゆき、将来の出来ごとを示すのは、人間が神の視点を獲得し始めた一つの指標と考えてよい。その後、18世紀には、ダンテ『新曲』の流れを汲む、宇宙から地球を見るという壮大な眺望詩が書かれる一方で、語り手が身近な丘から周辺を見渡して眺望体験を叙述する

という18世紀英国の眺望詩が発達する。そうしたなかで、1783年にはモンゴルフィエ兄弟 (Montgolfier) がフランスで熱気球を考案し、神の視点の特権が侵されることになる。(現に、モンゴルフィエ兄弟に先んじて小規模な無人熱気球の実験をしていたポルトガルのデ・グスマン司祭 (De Gusmão) は、異端審問への恐怖から実験を中止している。) しかし初期の熱気球の難点は、乗る人の数が限られているし、時間にも制限があるという

点であった。その上、著しい危険が伴う。それを一挙に解決したのが、パノラマ館であった。パノラマは神の視点を大衆が篡奪する装置だったのだ。

(注 \*ブレナム宮殿 プリントハイムの会戦での勝利を記念して、功績のあったモールバラ公爵ジョン・チャーチルに、時のアン女王が下賜した大邸宅。オックスフォードの北にある。世界遺産。)

パノラマ館が着実に大衆のなかに地歩を固めつつあった19世紀初頭、かつてはカールトン・ヒルで父親のパノラマ画製作を手伝ったことのあるヘンリー・バーカー (Henry Aston Barker, 1774-1856) は、皮肉にも大衆に背を向け、特定のパトロンとの関係を深めてゆく。1802年3月、交戦状態にあった英国とフランスの間に東の間の平和の時が訪れる。アミアンの和約といわれる14カ

月ほどの期間である。この時にパリを訪れた英国人観光客のなかにヘンリー・バーカーがいたらしい。彼がどのようにしてナポレオンに取り入ったかは分からない。しかし限られた資料のなかで、次に彼の名が登場するのは、1814年のことだ。オーストリア・プロイセン軍、スウェーデン軍、英国軍に包囲されたパリから、マルモン元帥らに追放されてエルバ島に落ちたナポレオンの随員員のなかに、40歳をわずかに過ぎた画家ヘンリー・バーカーがいたのである。

ナポレオンが、新古典主義の画家ジャック＝ルイ・ダヴィッドを庇護し、共和政体寄りの政治画を多く描かせたことは良く知られているが、アミアン和約期には英国美術界の大御所ロイヤル・アカデミー会長のベンジャミン・ウェストラを晩餐会に招待して、トレンティーノ協定により欧州各地からルーヴルに集めた美術品を誇らしげに自慢している。さらに1810年には、オーストリア皇女マリ・ルイーザ



との祝婚行列をルーヴルの大回廊で挙行し、ベルベデーレのアポロ像やラオコオン像などに己の婚礼を目撃させている。

ここで重要なのは、こうした(新)古典主義的嗜好をもつナポレオンが、1814年の失意のエルバ島行きにヘンリー・バーカーを同行させたということである。己の凋落を予感した絶対権力者にとって、古典主義的な歴史画や政治画が無意味になったとは言わない、ただカールトン・ヒルからの眺望に象徴されるような心の拓がりやを欲していたことも事実だったのだろう。エルバ島左遷時のナポレオンにとってパノラマ画は、古典主義的絵画に匹敵する位置を有していたと言える。これを、パノラマ画が正統

的藝術の位置に達したと見るか、神をも恐れぬナポレオンの傲慢とみるかは、意見の分かれるところかも知れない。

ただ事実だけを記せば、ウィリアム・ヘンリー・プレイ

フェア (William Henry Playfair, 1790-1857) によるカールトン・ヒル開発が始まる2年前の1822年には、パリでルイ・ダゲール (Louis Daguerre, 1787-1851) によって、初期のパノラマを発展させたディオラマ (diorama) なる装置が考案されていたのである。パノラマ画のキャンバスを巻いて絵を動かしていくような工夫をしたのである。やがて、それに音楽などの音響効果が加わり、これが映画へと発展していることになるのである。

現在でもエディンバラ城近くのロイヤル・マイル頂上付近の眺望塔 (Outlook Tower) にカメラ・オブスクラ暗室 (Camera Obscura) があり、視覚トリックで観光客を楽しませているのも、歴史的に由なしとはしないのである。

(かさはら・よりみち)

眺望研究家、英文学者 (専門は18-19世紀の詩) 明星大学教授。